

ART REVIEW

身近に潜む「美」の発見。毎月第2木曜日に掲載予定です。

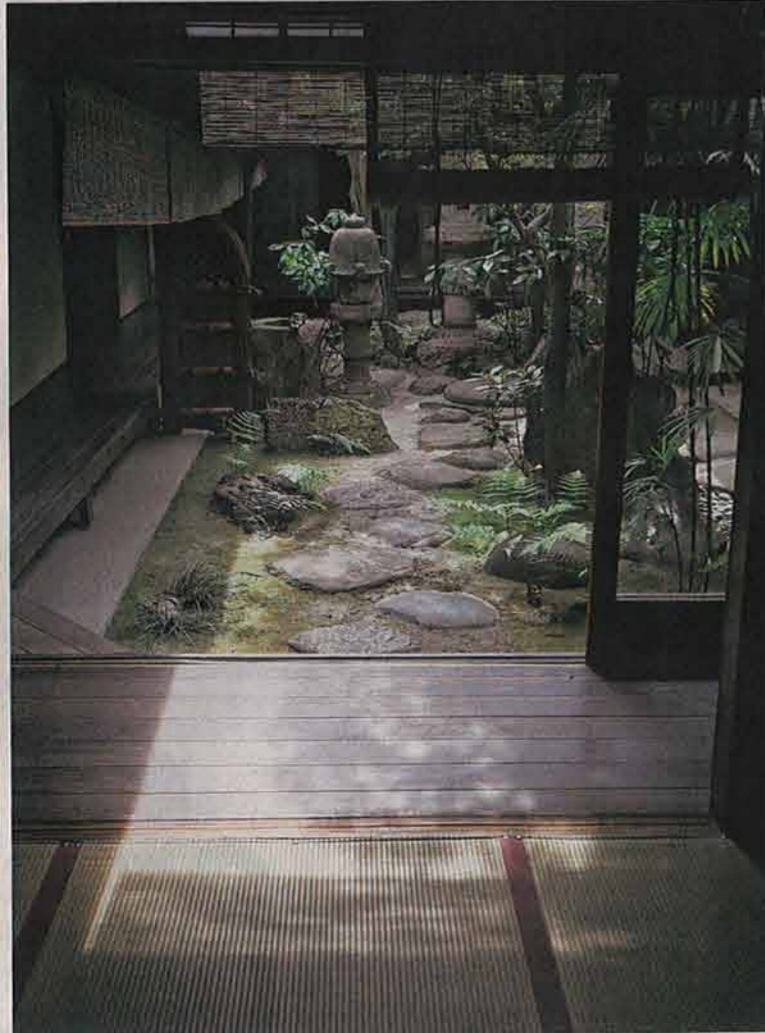


▶台所から見た玄関(中の間)と店。戸には表が見えるように無双窓が仕込まれている(左4点は長江家)



▶走り庭とおくどさん。棚の上には「火よけ」の神様の布袋さんが7体

▶奥の間の縁側から庭。庭に植えるのは常緑樹。石灯籠が風情を醸し出す



▶奥から見た通り庭(下)。店庭、玄関庭、走り庭を合わせて「通り庭」と呼ぶ



障子やすすまを風通しのよい葎(よし)戸や簾(す)戸に替え、すだれを下げる。座敷にはひんやりと心地よい藤箆(とむしろ)や網代といった敷物を敷く。庭に水を打てば風が流れる。一開け放つと風が入って比較的過ごしやすい」と長江さん。室内は屋でも薄暗いが、明るい庭との陰影のコントラストが見た目の涼しさを演出する。「先代は『まるで海中にいるみたいだ』と言いつつ奥の間で昼寝をしていました」と秦さんも話してくれた。

祭が盛り上がる宵山には、所有する屏風や美術品を飾る町家も多い。あでやかさが増し、さらなる情を感じさせることだろう。「土井誠司」



洗練された外観と深い奥行きが特色の京都の町家。「うなぎの寝床」とも呼ばれる伝統家屋を訪ねると、表と奥とで異なる顔を持ち、知恵と美意識を凝らした住まいであることに気づく。

京町家

表と奥

京都の町中を歩くと、近代的な家々の合間に昔ながらの町家が顔をのぞかせる。低い屋根、いぶし銀の瓦、格子、虫籠(むし)窓……。独特の意匠は周囲に埋没せず、懐かしさを感じさせる。下京区にある秦家住宅は屋根付き看板が印象的な京町家だ。1864年の禁門の変で焼失後、1869年に再建された。1700年に築種業を創業、1986年まで「苛應丸」という小児薬の製造を続けてきた。



▶外から格子越しには中が見えないが、中から外の様子がよくわかる(右5点は秦家)



▶店庭から。一角に庭(坪庭、右手奥)を設ける家も。のれんの向こうが居住空間になっている



▶庭のすぐ横に近代的なマンション。以前は町家が軒を連ねていた

屋の呼び名は微妙に異なるが、表から奥に3室または4室連なり、脇を通り庭」と呼ぶ土間が貫いているのが基本といえる。通り庭も位置によって「店庭」「玄関庭」「走り庭」と呼び名が変わり、玄関庭と走り庭はのれんでやんわりと仕切る。部屋によって機能・役割が異なる。表の「店」は商いの場。格子の向こうに通りが見える。「中」からは中がうかがいしれない。でも遮断はしていない曖昧な関係です」と秦さんは説明する。次が「玄関(中の間)」。大事な客を迎える場であり、当主はここから家へ上がる。一角に「坪庭」を設けるところもある。そこから先は居住空間

だ。「台所(だいどころ)」はキッチンではなく、家族が食事したり、くつろいだりする場所。炊事は脇の走り庭です。奥交う柱や梁(はり)の木の組みが美しい。炊事の際の煙や熱気を逃がす空間で、万が一、かまどの火が燃え移っても火を閉じ込めて延焼を防ぐ。上部は「火袋(ひぶくろ)」と呼ばれるタイナミックな吹き抜け構造になっている。縦横に行き交う柱や梁(はり)の木の組みが美しい。炊事の際の煙や熱気を逃がす空間で、万が一、かまどの火が燃え移っても火を閉じ込めて延焼を防ぐ。

庭に水を打ち涼しく呉服商を営む長江家がこの地に店を構えたのは1822年。当時の家はやはり禁門の変で焼失しており、現在の表屋造りの主屋は1907年に建った。全体の間口13m、奥行き54mというから、さらに細長い。庭の奥には化粧部屋と浴室、土蔵が2棟。その先には茶室があったという空き地が広がり、驚かされる。7月の京都は祇園祭の季節。「京の油照り」と呼ばれる蒸し暑い時期でもある。町家とともに長い年月を重ねてきた人たちは、そんな季節を乗り越えるために様々な工夫をしてきた。そのひとつが建具替えだ。

AR.1

NIKKEI

NIKKEI ART REVIEW・日経アートレビュー

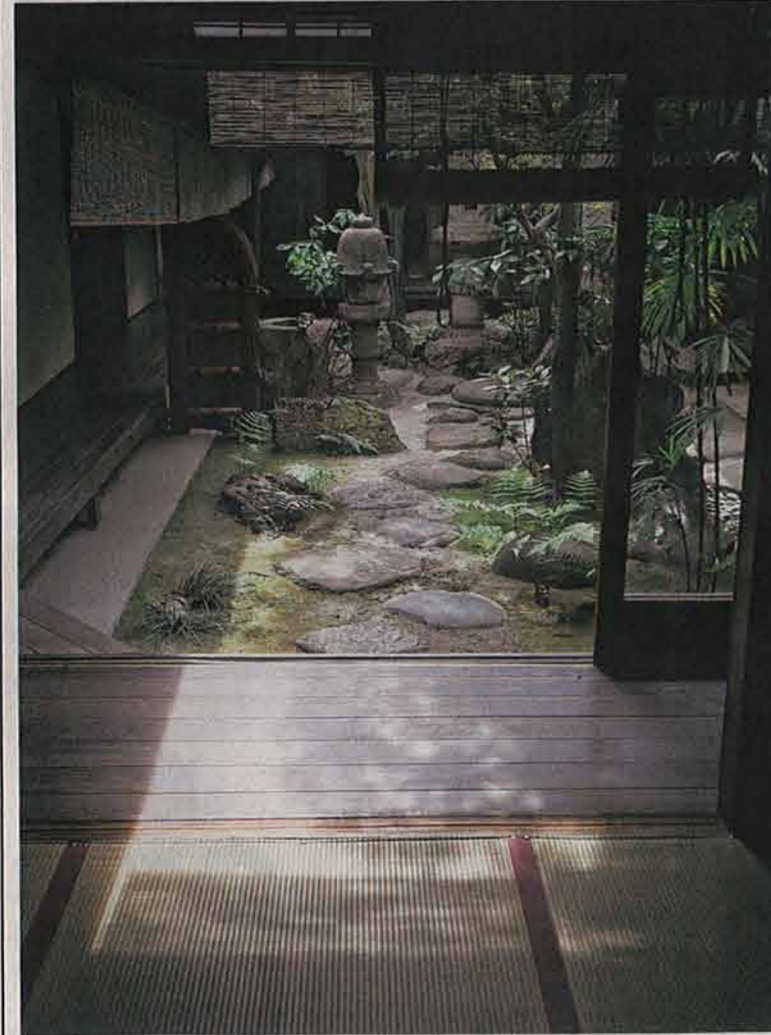
ART REVIEW

身近に潜む「美」の発見。毎月第2木曜日に掲載予定です。



▶走り庭とおくどさん。棚の上には「火よけ」の神様の布袋さんが7体

▶奥の間の縁側から庭。庭に植えるのは常緑樹。石灯籠が風情を醸し出す



▶奥から見た通り庭(下)。店庭、玄関庭、走り庭を合わせて「通り庭」と呼ぶ

「土井誠司」

▶台所から見た玄関(中の間)と店。戸には表が見えるように無双窓が仕込まれている(左4点は長江家)

京都の町中を歩くと、近代的な家々の合間に昔ながらの町家が顔をのぞかせる。低い屋根、いぶし銀の瓦、格子、虫籠(むしご)窓……。独特の意匠は周囲に埋没せず、懐かしさを感じさせる。

下京区にある秦家住宅は屋根付き看板が印象的な京町家だ。1864年の禁門の変で焼失後、1869年に再建された。1700年に薬種業を創業。1986年まで「奇應丸」という小児薬の製造を続けてきた。

表は商いの場
この家で生まれ育った秦めぐみさんが案内してくれた。間口10畳に対して奥行きは30畳。なるほど細長い。京町家は職住一体の商人の家。秦家は「表」と住まい(奥)の棟が別々に分かれ、両方を玄関棟がつないでいる。「表屋造り」と呼ばれる大店特有の形式だ。京町家は平安時代中期

に起源を持つ。外観や間取りなど現在の型が成立したのは江戸中期とされる。京都市が立命館大学などと実施した「京町家まちづくり調査」(2008~09年度)によれば、市域に残る町家は4万8000軒弱。間口が狭く奥行きが深い独特の造りは間口の幅で徴税額が決まっていたからという説があるが、定かではない。

家によって間取りや部



▶外から格子越しには中が見えないが、中から外の様子がよくわかる(右5点は秦家)

▶店庭から、一角に庭(坪庭、右手奥)を設ける家も。のれんの向こうが居住空間になっている



▶庭のすぐ横に近代的なマンション。以前は町家が軒を連ねていた

障子やふすまを風通しのよい葎(よし)戸や簾(す)戸に替え、すだれを下げる。座敷にはひんやりと心地よい籐筵(とむしろ)や網代といった敷物を敷く。庭に水を打てば風が流れる。「開け放つと風が入って比較的過ごしやすい」と長江さん。室内は屋でも薄暗いが、明るい庭との陰影のコントラストが見た目の涼しさを演出する。「先代は『まるで海中にいるみたいだ』と言いながら奥の間に昼寝をしていました」と秦さんも話してくれた。

祭が盛り上がる宵山には、所有する屏風や美術品を飾る町家も多い。あでやかさが増し、さらなる情趣を感じさせるのだらう。



京町家

表と奥

洗練された外観と深い奥行きが特色の京都の町家。「うなぎの寝床」とも呼ばれる伝統家屋を訪ねると、表と奥とで異なる顔を持ち、知恵と美意識を凝らした住まいであることに気づく。

屋の呼び名は微妙に異なるが、表から奥に3室または4室連なり、脇を通り庭」と呼ぶ土間が貫いているのが基本といえる。通り庭も位置によって「店庭」「玄関庭」「走り庭」と呼び名が変わり、玄関庭と走り庭はのれんでやりわりと仕切る。部屋によって機能・役割が異なる。表の「店」は商いの場。格子の向こうに通りが見える。「中」から外はよく見えるが、外からは中がうかがいしれない。でも遮断はしていない曖昧な関係です」と秦さんは説明する。次が「玄関(中の間)」。大事な客を迎える場であり、当主はここから家へ上がる。一角に「坪庭」を設けるところもある。そこから先は居住空間

上部は「火袋(ひぶくろ)」と呼ばれるタイナ族が食事したり、くつろいだりする場所。炊事は脇の走り庭です。奥の間の煙が美しい。炊事の煙や熱気を逃がす空間で、万が一、かまどの火が燃え移っても火を閉じ込めて延焼を防ぐ。

「台所(だいどころ)」はキッチンではなく、家族が食事したり、くつろいだりする場所。炊事は脇の走り庭です。奥の間の煙が美しい。炊事の煙や熱気を逃がす空間で、万が一、かまどの火が燃え移っても火を閉じ込めて延焼を防ぐ。

山居」と言われるゆえんです」と秦さん。

主婦が忙しく走り回ることからその名が付いたという走り庭は、近年かまどをつぶし、使いやすさで改装する家が増えた。同じ下京区にある長江家住宅では、昔ながらの姿を見ることができるとおっしゃる。おくとさん(かまど)にまきを入れてね。第2次世界大戦直後まで使っていた」と当主の長江治男さんは振り返る。

この地に店を構えたのは1822年。当時の家はやはり禁門の変で焼失しており、現在の表屋造りの主屋は1907年に建った。全体の間口13畳、奥行き54畳というから、さらに細長い。庭の奥には化粧部屋と浴室、土蔵が2棟。その先に以前は茶室があったという空き地が広がり、驚かされる。

7月の京都は祇園祭の季節。「京の油照り」と呼ばれる蒸し暑い時期でもある。町家とともに長い年月を重ねてきた人たちは、そんな季節を乗り越えるために様々な工夫をしてきた。そのひとつが建具替えだ。

